

Bulletin

交通 ● ブリテン

ISSN 1349-9610

2019年
夏期号

50

DEPARTMENT OF TRANSPORTATION SYSTEMS ENGINEERING • COLLEGE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY • NIHON UNIVERSITY

シリーズ「学科の社会貢献とは？」

第8回 研究活動の社会実装化

Contents

- 2 研究活動の社会実装化
- 3 [1] スマフォアプリを利用した多様な交通手段の利用可能性の拡大へ
- 4 [2] 環境共生型交通インフラの整備に向けた検討—野生動物との交通事故ゼロを目指して—
- 5 [3] 新材料の実用化に向けて
- 6 教員のメディア出演の紹介
- 8 授業紹介 「交通現象解析 I・II」都市の交通を知るための調査手法と分析手法を学ぶ
- 10 教室の動き
- 12 COLUMN
- 12 編集後記

表紙写真は、交通システム工学科写真コンテストの写真です。
撮影者：小山田 祥さん

研究活動の社会実装化

「交通プリテン」50号では、交通システム工学科の各研究室がどのような研究をして、その成果をよりよい社会のためにどのように役立っているかを特集しました。社会実装というのは、得られた研究成果を社会問題解決のために応用、展開することです。交通システム工学科の研究活動（学生（卒業生、修論生）、教員）の取り組みと、それが社会問題の解決にどのように活かされているのか、その事例を紹介します。

交通システム工学科は、交通計画系群、交通環境系群、交通基盤系群の3つの系群からなっています。

交通計画系群では、活力ある国土・地域づくりのために交通をマネジメントし、道路上の安全性と円滑性を高めるための研究や、都市交通管理や地区交通計画を中心として研究を進めています。さらに海外に目を向けて、タイ、インド、オーストリアの大学等とも、さまざま交通問題を研究しています。つまり、交通問題は日本だけに限らず、海外における交通問題も扱っています。

交通環境系群では、公共交通や福祉交通、観光交通等の利便性向上に向けた検討や、環境に配慮した交通インフラ整備の計画や評価を行い、衛星測位シ

ステム（GNSS）、レーザー計測技術をベースに、先進的なセンサを利用して、位置や形状を可視化する研究を行い、3次元地図の整備等への応用を目指しています。

交通基盤系群では、都市機能を維持していく上で、今日的な課題や社会的な要請を整理し、新しい制度設計の提案を行い、構造工学や材料工学、ならびに維持管理工学の視点から研究を行っています。さらに、交通施設に関連する地盤の力学的問題や、維持管理等について研究を行っています。

このように、社会に求められる交通システムを幅広く研究しているのが、交通システム工学科の特徴といえます。今回は、それぞれ3つの系群の先生方から、研究室における研究活動の取り組みを紹介していただきます。さらに、テレビ出演等のメディアに出演された先生方のご紹介をしています。テレビ出演の際には、一般の方々に分かりやすく交通問題を解説されていますので、高校生の皆さんにも、交通システム工学科がどのような交通問題を取り上げているのかを理解することができます。

それでは、交通システム工学科が社会の交通問題とどのように関わっているのか、見ていきましょう。

1

スマフォアプリを利用した多様な交通手段の利用可能性の拡大へ

福田 敦、小早川 悟、安井一彦、石坂哲宏、吉岡慶祐、菊池浩紀

国際研究プロジェクトスタート

新興国、とりわけインドでは、交通量増大による交通混雑の激化、温暖化ガスの排出などが社会的課題となっています。そのような中、JICA（国際協力機構）とJST（科学技術振興機構）が共同で進める国際共同研究プロジェクトSATREPSに本学科教員らが参画して、スマフォアプリを用いた研究を2017年度からスタートしました。

スマフォアプリを利用した多様な交通手段の交通情報提供

皆さんの多くは、スマートフォンを使って目的地までの移動手段や移動経路を調べることを日常的に行っていると思います。東京に限定して考えると、都市鉄道が面的に充実しており、出発地駅から目的地駅までを検索すれば、移動は十分可能になると思います。一方、多くの新興国では都市鉄道などの公共交通は十分なネットワークを有しておらず、出発地から最寄り駅まで、到着駅から目的地までの交通手段を有機的に考えなければ、移動が難しい側面があります。

そこで活躍することができるのが、スマフォアプリです。しかし、アプリを構築するだけでは意味がありません。交通情報を収集したり、既存の情報と統合したりしなければなりません。また、情報の提供の仕方等も工夫しな



インドの研究メンバーと本学の桜の下で

ければなりません。本プロジェクトでは、インドのアーメダバード市を対象に、マルチモーダルな交通情報の収集から提供に至るスマートフォンアプリの開発・提供を進めています。

交通情報収集のためにAIを利用した画像処理

共同研究を進めているインド工科大学ハイデラバード校では、センシング機器のキャンパス内での実践（QRコードを参照）などを進めており、本学とも共同で画像処理にもチャレンジしています。



プロジェクト公式サイトへ

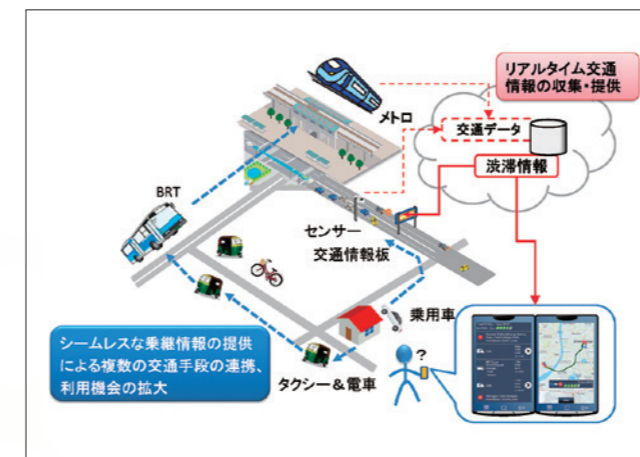


図-1 アプリを核とした交通情報の統合



図-2 アプリのイメージ

2

環境共生型交通インフラの整備に向けた検討
—野生動物との交通事故ゼロを目指して—

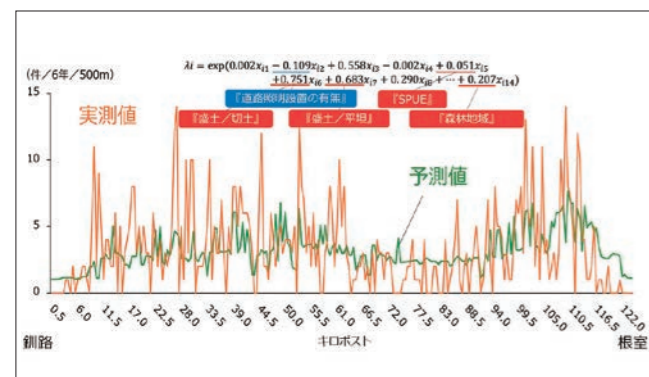
准教授 伊東英幸

野生動物との交通事故ゼロを目指して

道路で動物が轢かれているのを見たことがありますか？動物と自動車の事故は日本各地で起きており、とくに北海道では、エゾシカと自動車の衝突事故が毎年約2,000件あり、死亡事故も起きています。そこで、北海道で最も事故が多い国道44号を対象として、どのような場所でエゾシカとの事故が起きやすいのか、また動物が道路を横断できるように造られた橋はどれくらい利用されているのか、などについて国土交通省や北海道警察等と研究を行っています。

エゾシカと自動車の事故発生要因の分析

釧路と根室を結ぶ国道44号の周辺には、多くのエゾシカが生息しており、道路を横断しようとしたエゾシカに車が衝突したり、エゾシカを避けて急ハンドルを切ってしまう対向車や道路脇に衝突したりする事故が、多く見られます。そこで、道路周辺の土地利用や道路構造、フェンスや道路照明の有無などを現地調査して分析した結果、とくに道路周辺に森林が広がっている区間や、道路が盛土構造になっている区間は、エゾシカが急に飛び出てきた場合に対応ができずに事故を起こしやすいことがわかりました。一方で、エゾシカは夜間に行動するため、道路照明の設置による事故削減効果があることがわかりました。現在、これらの分析結果を踏まえて事故対策などを検討しています。



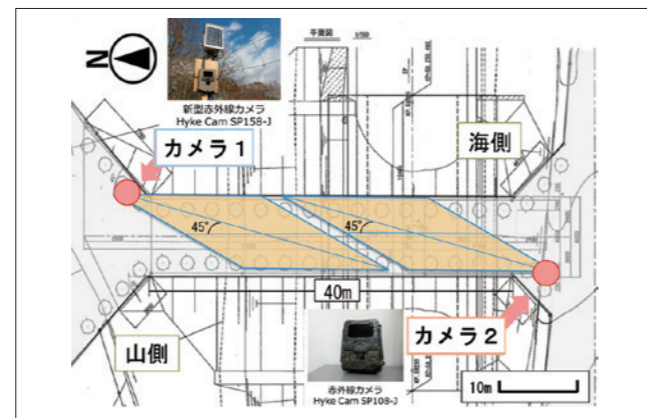
実際の事故発生状況と構築したモデルによる事故予測件数の比較

動物用横断施設の利用実態調査

国道44号の厚岸町糸魚沢地区には、さまざまな動物が道路を横断できる糸魚沢アーチカルバートが建設されており、道路建設によって分断された動物の生息環境をつなぐ役割や、事故に遭う動物を減らす効果があります。2015年11月18日より、アーチカルバート上に赤外線カメラを2台設置し、動物の横断状況を調査しています。赤外線カメラの前を動物が通過すると、自動的に写真が撮影される仕組みで、多くのエゾシカの横断が確認できました。この調査を通じて、動物の横断状況や行動パターンの変化、事故削減効果などについて研究を行っています。



糸魚沢アーチカルバート



赤外線カメラの設置位置



エゾシカの横断の様子

3

新材料の実用化に向けて

教授 峯岸邦夫、助教 山中光一

地盤工学研究室では、交通施設（鉄道、道路、空港、港湾などに関連する施設）の設計・建設に関わる地盤の力学的問題や新材料・新技術の開発、地盤構造物の維持管理に関わる諸問題を中心に研究を行っています。

ひとつは、地球温暖化抑制や騒音低減、夜間雨天時の視認性向上などの効果がある透水性舗装やインターロッキングブロック（ILB）舗装下に敷設するために表面を強化されたジオテキスタイル（土木用不織布）の耐久性および通水性能に関する研究です。土木用不織布とは、書道の下敷きなどで使用されるフェルトのようなものですが、舗装の下に敷設した時の耐久性や通水性を評価する明確な基準がありませんでした。そこで当研究室では、評価方法を確立すべく研究を行っています。（写真1、写真2）



写真1 ローラコンパクタを使用した表面強化不織布の耐久性試験



写真2 実際の舗装下に敷設された表面強化不織布

また、ジオシンセティックスと呼ばれる土木用安定資材を格子状に組み立てて、その空間に砕石のような粒状材料を充填して地盤内に敷設するジオセルと呼ばれる版状構造物の力学特性の把握と設計法の提案について研究を行っています。このジオセルは、空間に充填された粒状材料が周辺の壁によって変形が拘束され、強度が発揮されますが詳しいメカニズムは明確にされていないため、各種実験を行いメカニズムの解明に取り組んでおります。（写真3、写真4）

ここに挙げた材料は、実際の現場ですでに使用されていますが、経験的な知見から施工が行われており、一日も早く評価方法の確立やメカニズムの解明が望まれているのです。



写真3 室内模型実験(白く見える砂の下にジオセルが埋まっています)

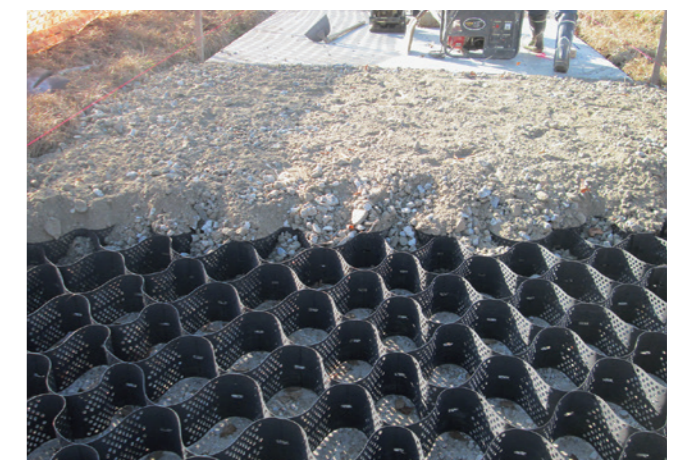


写真4 実物大現場実験(ジオセルに粒状材料を充填しているところ)

教員のメディア出演の紹介

ニュースやバラエティ番組の解説者として、テレビ番組をはじめ多くのメディアに出演しています。その一部を紹介します。



● 峯岸邦夫 教授

フジテレビ 「さまぁ〜ずの神ギ問」 2017年2月17日放送

「埋立地の底はどうなっているのか？」の回に解説者として出演しました。

実験室で軟弱地盤を想定した模型を用いて、実際の施工と同様の工法で軟弱地盤改良や護岸建設、地盤の埋め立てについて実験をしながら、わかりやすく解説を行いました。また、東京湾横断道路や東京外かく環状道路をはじめとするトンネルを建設される際に用いられるシールド工法についても、解説を行いました。



● 小早川 悟 教授

BS11 「噂の東京マガジン」 2014年1月19日放送



情報番組で放置自転車対策について解説しました。

住宅地の近くの鉄道駅で、自転車の駐輪施設をどのように整備していくかなどのアドバイスを行いました。



● 轟 朝幸 教授

BS フジ 「プライムニュース」 2014年8月13日放送

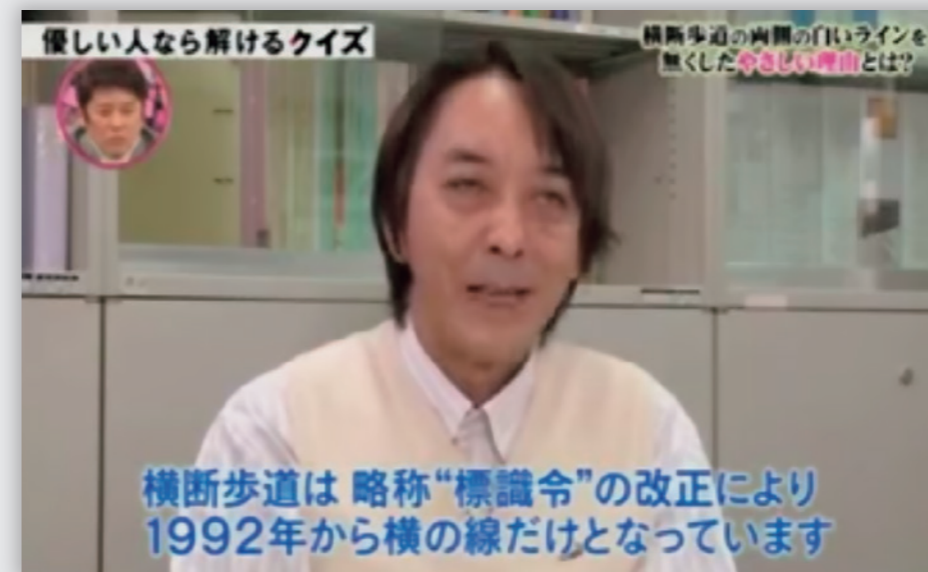
首都圏空港の機能強化について解説しました。

羽田空港など首都圏空港の機能強化は日本の発展のために不可欠です。しかし、さまざまな影響が及ぶため、関係者の理解をしっかりと得ないとけません。例えば、空港利用者は近隣の住民に騒音などの迷惑をかけているということを理解し、一方で住民は空港が地域経済へのアドバンテージがあることも理解しなければなりません。



● 安井一彦 准教授

フジテレビ 「優しい人なら解けるクイズ」 2016年2月23日放送



横断歩道の白線は、以前は縦と横に引かれていましたが、標識令の改正により横の線だけになったことを、クイズ番組で解説しました。

この標識令の改正により、水たまりができなくなり、安全に歩行できるようになることに加え、施工予算も安くなりました。

1. はじめに

交通現象解析ⅠおよびⅡは、都市の交通実態を把握するための調査手法および解析方法を学ぶ演習科目で、他に類を見ない本学科のユニークな交通専門科目のひとつです。

交通現象解析Ⅰは、3年生の必修科目で、交通調査概論および交通調査方法論を学習し、各種の現地調査によって収集したデータをもとにして交通現象を捉える能力を習得することを目的としています。さらに、グループ内でのコミ

ュニケーションを積極的に行いながら、現地調査の準備、実施、解析を行う能力を習得します。

交通現象解析Ⅱは、4年生の選択科目で、現地調査によって収集したデータを解析することで交通現象を捉え、都市・地域社会を交通の視点からデザインする交通改善計画の提案を行います。さらに、グループ内で合意形成を図りながら現地調査の準備、実施、解析、提案能力を習得することを目的としています。

2. 交通現象解析Ⅰでの調査合宿

交通現象解析Ⅰでは、学科3年生が全員参加の合宿形式での交通実態調査の演習を行います。調査合宿は、9月の夏季休暇期間中を利用し、例年3泊4日の日程で行っています。学科教職員、調査補助の大学院生と学部3年生を合わせた総勢150名以上が調査対象都市に滞在し調査を実施しています。対象とした都市は、2001年から2006年までの6年間は静岡県下田市、2007年から2013年までの7年間は静岡県富士宮市、そして2014年からは静岡県伊東市で調査合宿を実施しています。

なお、調査合宿では次の5つの調査を実施しています。

- ① 交通量調査：市内の主要交差点における交通容量調査および単路部における歩行者・自転車の交通量調査
- ② 地点速度調査：単路部における自動車の速度調査

- ③ 駐車調査：駐車施設におけるアンケート併用型駐車実態調査
- ④ 車両番号調査：市街地の外周に設定したコーンラインによる市街地への車両の流入出状況を把握する車両番号照合法調査
- ⑤ 旅行時間調査：交通の円滑性を評価するために車両（タクシー）に乗りして走行状況を調査する旅行時間調査

学生の多くが初めて調査対象都市を訪れるため、合宿1日目には、市内の交通基盤整備状況と都市計画マスタープラン等の講義を、市役所の方々の協力を得て実施しています。その後、大学院生とともに各班に分かれ、市内の各交差点等にある調査場所の現地踏査を行います。2日目以降から本格的な調査に入りますが、調査合宿全体としては右の表に示したスケジュールで実施しています。

3. 交通現象解析Ⅰでの課題レポートの取りまとめ

交通現象解析Ⅰでは、調査合宿で実施した交通実態調査のデータをもとに、その結果をレポートとしてまとめることが学生には課せられています。ひとつの調査について、ひとつの解析レポートを提出することになります。班ごとに調査データの解析を行います。解析レポートの作成に

ついては、原則的に個人別に提出することとなります。レポートの作成のためには、表計算ソフトを用いた図表の作成等が求められますが、ここで得られたスキルは卒業論文作成や卒業後のさまざまな業務に応用可能です。

4. 交通現象解析Ⅱでの対象都市への交通改善策の提案

交通現象解析Ⅱでは、交通現象解析Ⅰで行った交通実態調査の解析データをもとに、対象地区における課題と改善案を検討し地区交通計画を作成する「地区交通計画のための交通改善策の提案」を行います。対象都市の交通改善策の検討と地区交通計画の提案を、グループごとにプレゼンテーション形式で行い、これを担当教員および大学院生が聴講し、質疑応答の後に採点評価を行います。

さらに、交通現象解析Ⅱで学生から提案された地区交通の改善案は、対象都市の担当部署にそのままの形で提出し見ていただいています。その内容は、地域の活性化を意図したもの、交通安全対策に重点を置いたもの、駅前広場の改善を提案したもの、さらには新たなモビリティの導入を検討したものなどがあり、市役所の方々からさまざまな評価をいただいています。

5. おわりに

交通現象解析Ⅰは、教員・大学院生・学生が一緒になって合宿形式で交通調査の方法を学び、その後のレポートで交通データの分析方法を学ぶ、本学科の特徴的な科目のひとつです。さらに、交通現象解析Ⅱでは、その結果を対象都市の市役所にフィードバックを行っており、交通現象解析ⅠとⅡは全体を通して非常に実践的な科目といえます。

なお、本科目の実施にあたっては、本学科の全教職員と調査対象となる市役所の方々の多大なご協力によって実現しているものです。このような講義や演習を通して学生のコミュニケーション能力やファシリテート能力の向上に役立っていると考えます。

表 調査合宿のスケジュール

	講義日	1日目	2日目	3日目	4日目
午前	大学にて 各種交通調査の 講義	(往路)	①交差点調査 ②地点速度調査	グループA ④車両番号調査	グループB ⑤旅行時間調査
午後		【講義】 都市計画の概要 (市役所都市計画課) 【現地踏査】	③駐車調査	グループB ④車両番号調査	グループA ⑤旅行時間調査
夜	—	①②③調査の説明	④⑤調査の説明	懇親会	【現場見学会】 (復路)

調査本部の風景▼

▼市役所からの説明

◀交通量調査

▼駐車調査

▼タクシーを用いた
旅行時間調査

教室の動き

今年度の主な教室の教育関連行事の概要を報告します。

1年生のオリエンテーション

轟 朝幸、伊東英幸、山中光一（1年生担任）

毎年、新入生に対して入学後の友人づくりの機会を提供することを目的に、オリエンテーションを実施しています。本年度は、4月20日（土）に新入生112名、大学院生19名、教職員20名で、千葉県にある「いすみ鉄道」へ行きました。

現地では、本学の卒業生でもある古竹孝一社長や大多喜



古竹社長の講演



いすみ鉄道に乗り込む学生



インタビュー中の学生たち

町町長の講演を聞いたのち、いすみ鉄道沿線のまちあるきを行いました。まちあるきでは、サイコロの出目の数だけいすみ鉄道の駅を移動し、降りた駅で現地の方々にインタビュー等を行いました。このまちあるきをしてきた内容を活かして、毎年インセンティブの講義で実施している地域調査プロジェクトで地域活性化のための提案を行う予定です。

当日は天候にも恵まれ、学生同士のコミュニケーション、先生方とのコミュニケーションが深まりました。

付属高校生のためのオープンカレッジの開催報告、オープンキャンパスのご案内

兵頭 知（広報連絡担当）

■付属高校生のためのオープンカレッジの開催報告

6月9日（日）に開催されました、付属高校生のためのオープンカレッジにお越しいただきました付属高校の生徒の皆さま、そしてご家族の皆さま、誠にありがとうございました。本年度よりタワー・スコラにて開催されました。当日は、学科における交通を学ぶ楽しさを体感していただくべく、教育内容や研究内容を見学するだけでなく、工



付属高校生のためのオープンカレッジの様子



付属高校生のためのオープンカレッジでの「ミニ講義」

作、実験や試乗等「体験型」の学科独自プログラムをたくさん用意させていただきました。その結果、当学科の展示エリアには例年を上回る多くの高校生に会場してもらい、興味深く説明を聞いていただけました。

■オープンキャンパス

【8月3日（土）・4日（日）10:00～15:00（受付9:30～）、船橋キャンパス】

昨年に続き、今年も夏のオープンキャンパスが広大な船橋キャンパスにおいて2日間開催されます。当学科では、交通工学に関連した興味深い研究内容をわかりやすく紹介しながら、研究成果が大学の講義や実習にどのように活かされているのか、交通を専門とする教員・学生スタッフが説明する予定です。また、交通を学ぶ学生が、何を勉強し、何を制作しているのか、講義ノートや学生作品などを展示するブースも設置予定です。その他、毎年実施している「ミニ講義」「面談形式による学科相談」に加え、交通総合試験路での「セグウェイ体験試乗」や「ドライビングシミュレーター体験」なども行いますので、ぜひお気軽にお越しください。交通工学の最先端の世界が、皆さまをお待ちしております！

オープンキャンパス ミニ講義

▶ ラウンドアバウトが有する機能と価値

教授 下川澄雄

【ミニ講義A1：8月3日（土）11:50～12:20 / 1423教室】

▶ 身近な道路の交通安全対策

教授 小早川 悟

【ミニ講義A2：8月4日（日）11:50～12:20 / 1423教室】

▶ スマートで安全な移動を実現する「事故リスク情報」とは？

助教 兵頭 知

【ミニ講義B1：8月3日（土）13:20～13:50 / 1423教室】

▶ あって当たり前！道路の下はどうなっている？

助教 山中光一

【ミニ講義B2：8月4日（日）13:20～13:50 / 1423教室】

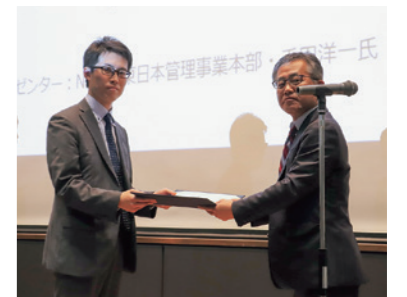
▶ 写真コンテスト2019作品展

交通システム工学は毎年、「交通」に関する写真コンテストを開催しています。今年は「交通と人々」をテーマに作品の募集を行いました。応募された作品の展示会および表彰式は、オープンキャンパスと同時開催で行われますので、皆さまのお越しをお待ちしております。

受賞報告

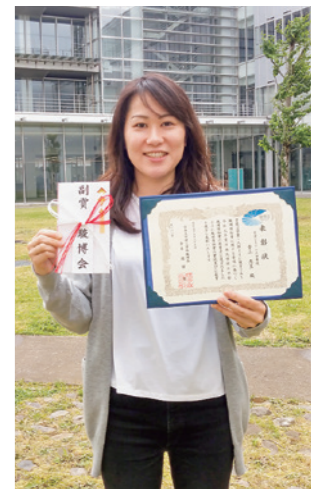
土木学会インフラデータチャレンジでプラチナスポンサー賞を受賞

（公社）土木学会主催のインフラデータチャレンジにおいて、道路マネジメント研究室が発表した分析がプラチナスポンサー賞を受賞しました。高速道路のデータを使って渋滞の起きやすさについて分析したもので、ドライバーが渋滞に巻き込まれるほど交通容量が低下することを示しました。



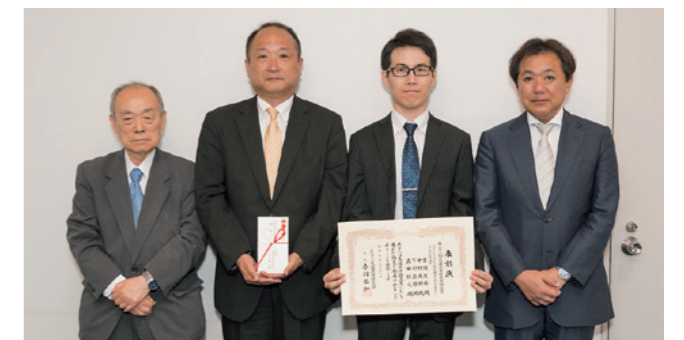
駿博奨励賞を受賞

交通システム工学専攻博士後期課程3年の青山恵里さんが、日本大学理工学部駿博会の駿博奨励賞を受賞しました。この賞は、理工学部の博士後期課程の学生の中から優秀な学生が選ばれるものであり、日ごろの研究活動や学生生活に対する取り組みが評価されました。



交通工学研究会論文賞を受賞

吉岡慶祐助手、下川澄雄教授、森田緯之客員教授の共著論文が、（一社）交通工学研究会の第33回交通工学研究会論文賞を受賞しました。受賞論文は「ラウンドアバウトの幾何構造が走行挙動特性に与える影響分析」で、ドローンを使った調査でラウンドアバウトを走行する車両の挙動を分析し、幾何構造と車両挙動の関係を明らかにしたものです。





交通 Bulletin 発刊から50号までの 巻頭言を振り返って

齊藤準平
交通 Bulletin 編集委員

交通 Bulletin は現役大学生や受験生に学科情報を提供する
目的で発刊された学科広報誌である。2002年に発刊されてから
2019年夏号の今号で節目の50号が発行されるに際し、第1号か
ら第50号までの巻頭言のタイトルと執筆者を整理した。以下の
一覧表をご覧ください(全号に巻頭言が掲載されるのでは

ないため、32タイトルとなっている)。

巻頭言は教室主任や教授・准教授が執筆することが多い。教
室主任が新しくなった際には新教室主任によってこれからの学
科の方向性と目標を述べられることが多く、教員が退職する際
には自身の足跡や学生への励ましを述べられることが多い。そ
のほか、交通に関するホットな話題、自身の研究に関すること、
学生への激励等、教員それぞれの思いが執筆されている。振
り返ってそのタイトルを眺めてみると、当時各々の教員が何を
考え、何を発信したかったのかがうかがえてとても興味深い。

号	タイトル	執筆者
2002年 春号	社会交通工学科「交通 Bulletin」の再刊に際して	巻内勝彦
2002年 2号	教室主任交代にあたって	星埜正明
2003年 春季号	やる気を引き出す秘訣は……? 社会交通工学科に着任して	轟 朝幸
2004年 4号	授業評価への期待	福田 敦
2004年 春季号, No.5	技術環境の変質と「けんか」必要論 —技術立国としての技術持続のために—	高田邦道
2004年 秋季号, No.6	S. K. 君への手紙	伊東 孝
2005年 春季号, No.8	退職にあたって	宮森建樹
2005年 秋季号, No.9	コンクリートポート	柳沼善明
2006年 春季号, No.11	今、時代の変化をつかめ —チャンスは君たちのものだ!—	伊澤 岬
2006年 秋季号, No.12	新任の挨拶	天野光一
2007年 春季号, No.14	—多孔質天然素材への誘い	下辺 悟
2007年 秋季号, No.15	芸術の世界そして私たちの 交通・都市づくりにおけるアルカイズム	藤井敬宏
2008年 春季号, No.17	—伝統を踏まえつつ、新たな展開を目指して—	天野光一
2008年 秋季号, No.18	ソウルの都市(交通)改革	安井一彦
2009年 春季号, No.20	新任の挨拶「新たな取り組みに向けて」	福田 敦
2009年 秋季号, No.21	交通分野における測量技術と地理空間情報	佐田達典

号	タイトル	執筆者
2010年 春季号, No.23	対談 これからのエンジニアリング	高田邦道・ 脇 雅史
2010年 秋季号, No.24	温故知新 —「叩く!」という視点から—	岩井茂雄
2011年 春季号, No.26	実践に対応できる講義を目指して	峯岸邦夫
2011年 秋季号, No.27	定年を迎えて 個人研究+グループ研究、そして組織の面白さ	伊東 孝
2012年 特別号, No.29	隙を紡ぐこと、デザイン。	伊澤 岬
2012年 春季号, No.30	伝統を受け継ぎ次のステージへ	佐田達典
2013年 春季号, No.32	学科名称変更にあたって —社会交通工学科から交通システム工学科へ—	佐田達典
2013年 秋季号, No.33	「考える」ということ —自主創造と技術者教育	小早川 悟
2014年 春季号, No.34	もう一度、日本の国土と交通について考えてみませんか	下川澄雄
2015年 春季号, No.37	スマート化	轟 朝幸
2016年 春季号, No.40	学窓雑誌と研究余滴	下辺 悟
2017年 冬季号, No.42	新任として	峯岸邦夫
2017年 年報号, No.43	退官の挨拶	下辺 悟
2018年 年報号, No.46	新任に当たって、「ものづくりのすすめ」	鈴木 圭
2019年 年報号, No.49	実験は修行の如し	齊藤準平

編 集 後 記

今回は、シリーズ「学科の社会貢献とは?」の第8回とし
て、「研究活動の社会実装化」をテーマにいたしました。社会
実装とは、得られた研究成果を社会問題解決のために応用、展
開することです。本学科の卒業研究や修士研究および教員の研
究が社会問題解決に活かされて、社会貢献している事例を紹介
いたしました。いずれも、現在および将来の社会問題の解決を
見据えた、研究に対する気概がうかがえます。進学分野を考
える高校生や配属研究室を考える学部生の皆さんにとって、研
究室の取り組む研究内容や学生研究が社会に貢献していること
を感じていただければ幸いです。

今回で節目の50号の発行を迎えました。今後も、交通シス
テム工学科の広報誌としてその役目を果たせるよう、努めて参
りたいと思います。(齊藤)

われわれ研究者は、「理論」と「実際」という言葉にしば
しば直面します。例えば、難解で高度な「理論」に基づいた研
究成果も、それが「実際」に社会で役に立たないようでは工学的
な意味がないということです。

今回のテーマは「社会実装」ということで、学科の研究成果
がどのように役立つのか、あるいは社会に貢献しているのかを
紹介しました。皆さんの興味を引くような研究はあったでしょ
うか。交通システム工学は私たちの生活に密接に関わっており、
非常に身近に感じる分野です。したがって、よくテレビに出
て解説をしている教員もいます。

テレビに出ることが研究者の目的ではないですが、でもスタ
ジオで女優さんやタレントさんに会えるのなら、それも悪くな
いですね(笑) (吉岡)